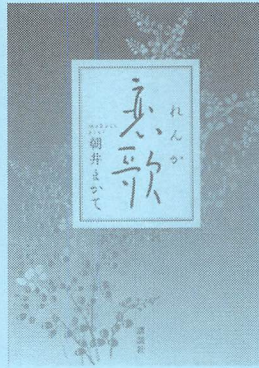


先生の お勧め

『恋歌』

地歴公民科 坂本 壽幸
朝井 まかて (講談社)



この小説は、水戸藩で起こった天狗党の乱によって人生を振り回された女性の物語で、今年の1月に発表された第一五〇回直木賞受賞作品です。

幕末の水戸藩は、尊王攘夷論の先鋒として時代を大きく動かしていきながら、内部抗争のため多くの人材を失い、明治新政府では重要な地位を占められませんでした。天狗党の乱では、各地の争いの死者に加え、最終的に投降した828名中、352名も処刑されました。幕末に起こった事件では、最大規模の犠牲者を出しています。

尊王攘夷派の天狗党が筑波山で挙兵し

た後、保守派の諸生党が藩内の主導権を奪い、天狗党の家族は捕らえられ、現在の水戸市東台二丁目にあった赤沼牢屋敷に投獄されます。女性や子どもが犠牲になつていく部分は読み進めるのがつらくなります。男たちの争いに振り回され、命をも奪われるのが当然の世の中を生き延びた主人公・中島歌子は、己の思いを伝える道具として和歌を学ぶことを決心し、歌人として明治の世を生きます。

君にこそ恋しきふしは習ひつれ

さらば忘るることもをしへよ

作者は、「負けない小説」を目指して書いたとのこと。悲しい話ではありますが、前向きに生きたいと思えるようになる小説です。水戸が舞台となっている小説でもありますので、ぜひ読んでいただきたいと思います。

なお、天狗党の乱に絞った小説としては、吉村昭氏の『天狗争乱』もお勧めです。幕末の水戸で何があつたのかがよくわかります。

『沈黙』

国語科 梶 裕美
村上 春樹
(全国学校図書館協議会)



『風葬の教室』

山田 詠美
(河出書房新社)



子どものころ、本ばかり読んでいた。高校時代の放課後は駅前の書店に直行し、友人があきれるくらい本を抱えて帰った。内気で人見知りしがひどく、リアルな世界で人と関わるのが怖かったあの頃、本だけが世界を知るたつた一つの手だてだったから、活字を追っている時間は至福だった。

さまざまな人、関係性、価値観。生きることの喜び、悲哀。知りたいことは皆そこにあつた。自分と似たような人間がいることに安堵し、わが身の卑小さを感じ知って落胆し、深刻きわまりないものに思えた悩みも実は大したことないのかもしれないと相対化された。こうありたいという憧れ、そんなに人を恐がらなくてもいいんだという勇氣……。ほしいものは、ぜんぶ本がくれた。

中でも心を動かされたのは、『沈黙』と『風葬の教室』の主人公の生き方だ。いじめで周囲から孤立し身を削られるような日々の中で死さえ意識した主人公が、誰かに助けてもらうのではなく、心

の中のプライドの存在に気づき、自身の力で立ち直っていく物語である。
「自分が軽蔑し価値をみとめないものに簡単に押しつぶされるわけにはいかないです。」(『沈黙』)という言葉は、どれほど力をくれただろう。揺るぎない自己を持つことの大切さと美しさを、この二冊は示唆してくれた。

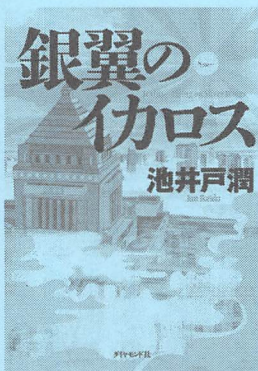
『ロズジェネの逆襲』

英語科 上田 博幸
池井戸 潤
(ダイヤモンド社)



『銀翼のイカロス』

池井戸 潤
(ダイヤモンド社)



「やられたらやり返す。倍返しだ!!」
2013年の流行語となったこの言葉。